

公的自己意識と接近回避志向が 作り笑いに与える影響

嶋 梨菜

(神原 歩ゼミ)

私たちは日常生活で喜怒哀楽など様々な感情を抱き、その感情を表出し相手に伝えることがある。例えば、面白いときや楽しい時は笑い、悲しい時は泣き、嫌なことがあれば怒る。しかし、感じた感情をそのまま表情に表すわけではない。押見(1999)は、感情を表出する1つとして笑いは、人間行動を特徴づける反応であり、複雑なものであると述べている。

感情の表出として特に表情に注目した Ekman & Friesen (1975) は、人は自分の感情を表出し、感情をコントロールすることで他者に影響を及ぼそうとするが、コントロールする表情の中でも笑い、特に微笑が重要な役割を果たしていると指摘している。例えば、面白く感じていないが空笑いする、悲しみや恐怖の感情を他人に悟られないようにするために笑顔を見せるなど、真の感情を隠蔽・擬装するための笑いがある。押見(1999)は、笑いを2種類に分類した。面白おかしい、愉快で楽しい、嬉しいといったポジティブな感情が起爆剤となって起こる「愉快笑い」と、面白おかしいといった自然な感情によらない、表向きだけの笑顔「作り笑い」である。福島(2008)では、微笑で感情を表出・隠蔽し、微笑は社交場の笑いであると思っている人ほど対人葛藤場面で服従や回避の方略をとっており、自己主張せずに他者の要求に従ったり、感情を微笑で隠したりしてその場を取り繕い不一致を回避していることが示唆されている。したがって、対人関係において、物事を円滑に進めるためには、快感情を表現する「愉快笑い」より「作り笑い」の方が重大な意義を持っていると考えられる。

作り笑い

押見(1999)は、日常生活においてみられる作り笑いの行動項目を収集し、作り笑い尺度を作成した。その結果、不愉快さや悲しい気持ちなど

ネガティブな感情を解消・隠ぺいしようとする意図の「感情制御」、他者を和ませることで場の緊張的雰囲気や解消したり、場を盛り上げたりする意図の「雰囲気操作」、他者の行為を矯正・統制しようとする意図の「行為統制」の作り笑いがあることを見出した。また、作り笑いはパーソナリティ要因の影響もあると予想し、作り笑いとの公的自己意識の関連を検討した。公的自己意識とは、他者から見られている自己の側面—容姿、しぐさ、行動様式—toに注意を向けやすい性質である(Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975)。その結果、感情制御と行為統制の作り笑いは、公的自己意識と正の相関があることも見出した。また、池田(2017)は、他者の思考や行動が自分と関連があり自分に向けられたものであると誤解ないし過大視する傾向であるパラノイアと作り笑いの関連について検討している。その結果、パラノイアが高い人ほどネガティブな感情を隠蔽しようとする「表出制御」の作り笑いを表出することを見出した。このことから、他者に悪い印象を与えないようにするためや、ネガティブな評価を回避するために作り笑いが表出されると考えられている。李・渋谷(2014)では、日本人はネガティブな感情を抑制するために作り笑いを多く表出すると示唆されている。

接近回避志向

作り笑いは、対人関係における何らかの目標を達成するために示されていると考えられている(押見, 1999)。目標を追求する志向性について、Higgins(1997)は制御焦点理論を提唱し、どのようにして快に接近し不快を回避するのかという快樂原則の追究の仕方において質的に異なる二種類を区別すべきであると主張した。制御焦点理論は、快・不快という二分法だけではなく、それぞれの質的内容を考慮すべきだと主張した点が特徴

公的自己意識と接近回避志向が作り笑いに与える影響

的である。接近対象となる快の状態は、利得の存在と損失の不在の二種類に分けられ、回避の対象となる不快の状態は、利得の不在と損失の存在に分けられる。そして接近と回避は促進焦点と予防焦点と呼ばれる独立した自己制御システムによって司られている。促進焦点は利得に焦点化した自己制御傾向を示し、利得の存在に接近し、利得の不在を回避するように行動をコントロールする。対人関係において他者と親しくなることを求め、親しくなれないことを避けようとする。一方、予防焦点は損失に焦点化した自己制御傾向を示し、損失の不在に接近し、損失の存在を回避するように行動をコントロールする。対人関係において他者に嫌われないことを求め、嫌われてしまうことを避けようとする。尾崎・唐沢（2011）は、促進焦点時に示される志向性を「利得接近志向」、予防焦点時に示される志向性を「損失回避志向」と命名した。また、尾崎・唐沢（2011）は接近回避志向と自己評価の関連について検討している。その結果、自己評価が肯定的であると利得接近傾向が強くなり、自己評価が否定的であると損失回避傾向が強くなることを見出している。

これまでの先行研究では、作り笑いとネガティブな評価を回避しようとするパーソナリティの関連を検討してきたが、ネガティブな状況を回避しようとする損失回避志向と作り笑いの関連は検討されていない。作り笑いがネガティブな感情を制御するために表出され、対人関係において目標を達成するために作り笑いが表出される（押見, 1999）と考えられていることから、作り笑いと損失回避志向に関連があると考えられる。

本研究では、ネガティブな感情を制御する際に表出される作り笑いに注目する。しかし、押見（1999）の作り笑い尺度は「人を笑わせようとする」というユーモアな要素が含まれており、ネガティブな感情を制御する作り笑いではないため、ネガティブな感情を制御する作り笑いの項目を収集し、作り笑い尺度を作成する。そして、ネガティブな状況を回避しようとする損失回避志向と公的自己意識がネガティブな感情を制御する作り笑いに与える影響を検討する。ここまで述べた先行研究の結果から、次の仮説を立てる。

仮説1 ネガティブな感情を制御する作り笑いは損失回避志向と関連があり、利得接近志向とは関連がないだろう。

仮説2 対人関係において損失回避志向が高い人は低い人より、他者に嫌われることを避けるため、ネガティブな感情を制御する作り笑いを表出しやすいだろう。

仮説3 公的自己意識が高く損失回避志向が高い人は、それ以外の人よりネガティブな感情を制御する作り笑いを表出しやすいだろう。

方法

予備調査（質問項目の作成）

2021年10月、作り笑い尺度を作成するため大学生13名に調査を依頼し、「あなたはどのような状況の時に作り笑いをしますか」という質問に対して、自由記述での回答を求めた。自由記述で収集した項目34個と押見（1999）の作り笑い尺度（感情制御）11個を合わせ、KJ法を用いて9つのカテゴリーに分類された。分類は次のとおりであった。「初対面の人と話すとき」（3項目）、「話が理解できない・聞き取れないとき」（3項目）、「話を終わらせたいとき」（2項目）、「嫌いな人と話すとき」（2項目）、「目上の人と話すとき」（4項目）、「面白くない話のとき」（3項目）、「アルバイトの時」（4項目）、「悲しい時・落ち込んでいる時」（2項目）、「友人が笑っている時」（5項目）。他の項目と重複するもの、「アルバイトの時」（4項目）はアルバイトをしている人にしか回答できないため質問項目から除去した。さらに、上記の自由記述で得られた回答と既存の尺度（押見, 1999）を参考に、最終的に14項目選定した。作り笑い尺度をTable1に示した。

調査期間

2021年12月3日から12月17日までに質問紙調査を実施した。

調査対象者

京都の私立大学の大学生が調査に参加した。

手続き

Web上で質問・回答を行うため、Microsoft Formsを使用し質問紙を作成した。調査対象者に、性別・年齢について回答を求めた。担当教員に依頼し、質問紙のURLを配布し自由意思による参加を求めた。また、筆者が個別に配布・回収を行ったものもある。Web質問紙の回答は全て匿名で収集され、本研究の目的は卒業論文の作成であることについての説明文を明記した。

質問紙の構成

(1) 作り笑い尺度：予備調査で選定した14項目を用いた。具体的には「初対面の人と話すときは笑顔を絶やさない」「話の内容が理解できないときや、話を聞き取れないときに笑ってごまかすことがある」「内心嫌っている人でも笑顔で挨拶する（押見, 1999）」「目上の人と会うときは笑顔で接する（押見, 1999）」「悲しいとき、人と会う際は笑顔で接する（押見, 1999）」「友人が笑っているときは面白くなくても笑うふりをする」「相手の元気がないとき、励ますために笑顔で接する」「自分の内心の不愉快さを知られないように、作り笑いをする（押見, 1999）」「顔で笑って心で泣いたようなことがある（押見, 1999）」「好意を持っている人と話すときは笑顔を絶やさない」「相手が不愉快そうなとき、わざと笑顔で接するようにする（押見, 1999）」「人前で失敗したとき、笑ってごまか

すことがある」「会話を終わらせたいときに、笑顔を見せる」「失敗の落ち度が相手にあるとき、笑顔で接するようにする（押見, 1999）」の14項目について「1.全くあてはまらない」「2.あてはまらない」「3.どちらともいえない」「4.あてはまる」「5.よくあてはまる」の5段階評価で尋ねた。

(2) 公的自己意識尺度：辻（1993）の自己意識尺度の下位尺度のうち、公的自己意識8項目を用いた。具体的には「自分をどのように見せるかに関心がある」「自分がどのように見えるかを意識している」「人に良い印象を与えたかどうか気になる」「出かける前には必ず鏡を見る」「自分が他の人にどう思われているかが気になる」「自分の外見には気を配っている」「自分の性格が人にどう思われているかに関心がある」「自分の体形やスタイルを常に意識している」の8項目について「1.全くあてはまらない」「2.あてはまらない」「3.どちらともいえない」「4.あてはまる」「5.よくあてはまる」の5段階評価で尋ねた。

(3) 利得接近志向尺度：尾崎・唐沢（2011）の利得接近志向尺度8項目のうち、因子負荷量が高い項目4つを用いた。具体的には「どうやったら自分の目標や希望をかなえられるか、よく想像することがある」「私はたいてい、将来の自分が成し遂げたいことに意識を集中している」「私は、“自分の理想”を最優先し、自分の希望や願い・大志をかなえようと努力するタイプだと思う」「将来

Table1. 作り笑い尺度（14項目）

- | |
|---|
| 1. 初対面の人と話すときは笑顔で挨拶する（押見, 1999） |
| 2. 話の内容が理解できないときや、話を聞き取れないときに笑ってごまかすことがある |
| 3. 内心嫌っている人でも笑顔で挨拶する（押見, 1999） |
| 4. 目上の人と会うときは笑顔で接する（押見, 1999） |
| 5. 悲しいとき、人と会う際は笑顔を示そうと心がける（押見, 1999） |
| 6. 友人が笑っているときは面白くなくても笑うふりをする |
| 7. 相手の元気がないとき、励ますために笑顔で接する |
| 8. 自分の内心の不愉快さを知られないように、作り笑いをする（押見, 1999） |
| 9. 顔で笑って心で泣いたようなことがある（押見, 1999） |
| 10. 好意を持っている人と話すときは笑顔を絶やさない |
| 11. 相手が不愉快そうなとき、わざと笑顔で接するようにする（押見, 1999） |
| 12. 人前で失敗したとき、笑ってごまかすことがある |
| 13. 会話を終わらせたいときに、笑顔を見せる |
| 14. 失敗の落ち度が相手にあるとき、笑顔で接するようにする（押見, 1999） |

公的自己意識と接近回避志向が作り笑いに与える影響

どんな人間になりたいかについて、よく考える」の4項目について「1.全くあてはまらない」「2.あてはまらない」「3.ややあてはまらない」「4.どちらともいえない」「5.ややあてはまる」「6.あてはまる」「7.よくあてはまる」の7段階評価で尋ねた。

(4) 損失回避志向尺度：尾崎・唐沢(2011)の損失回避志向尺度8項目のうち、因子負荷量が高い項目4つを用いた。具体的には「自分の責任や役割を果たせないのではないかと、よく心配になる」「恐れている悪い出来事が自分にふりかかってくる様子を、よく想像する」「目標とする成績をとれないのではないかと、よく心配になる」「私にとって、利益を得ることよりも、損失を避けることのほうが大事だ」の4項目について「1.全くあてはまらない」「2.あてはまらない」「3.ややあてはまらない」「4.どちらともいえない」「5.ややあてはまる」「6.あてはまる」「7.よくあてはまる」の7段階評価で尋ねた。

(5) 虚偽尺度：社会的望ましさ・作爲的回答を防ぐため「私は、笑ったことがない」を用いた。回答は「1.全くあてはまらない」「2.あてはまらない」「3.どちらともいえない」「4.あてはまる」「5.よくあてはまる」の5段階評価で尋ねた。

結果

調査回答者と分析方法

調査回答者は、18歳から41歳の107名(男性56名、女性47名、その他4名、平均年齢19.64歳、 $SD=4.43$)であった。そのうち同一回答が連続する1名と年齢が外れ値(41歳)である1名の回答者を除いた105名(男性54名、女性47名、その他4名、平均年齢19.44歳、 $SD=1.28$)を分析対象者とした。

なお、分析はIBM SPSS Statisticsを用いた。

各尺度の信頼性

それぞれの尺度についてCronbachの α 係数を用いて信頼性分析を行った。信頼性係数は、作り笑い尺度 $\alpha=.71$ 、公的自己意識尺度 $\alpha=.84$ 、利得接近志向尺度 $\alpha=.78$ 、損失回避志向尺度 $\alpha=.71$ であった。各尺度の信頼性の高さに問題がなかったため、それぞれの平均値を作り笑い尺度得点、公

的自己意識尺度得点、利得接近志向尺度得点、損失回避志向尺度得点とした。

各尺度の相関分析

各尺度間の関係をみるために相関分析を行った。結果をTable2に示した。

「作り笑い」と「損失回避志向」との間に弱い正の相関($r=.25, p<.01$)がみられた。また、「公的自己意識」と「利得接近志向」との間に弱い正の相関($r=.33, p<.01$)がみられた。

Table2. 各尺度間の相関係数

	作り笑い	公的自己意識	利得接近志向
作り笑い			
公的自己意識	.09		
利得接近志向	-.09	.32**	
損失回避志向	.25**	.02	.17

** $p < .01$

公的自己意識と損失回避志向が作り笑いに与える効果

相関分析の結果、作り笑いと損失回避志向に相関がみられ、利得接近志向とは相関がみられなかったため、公的自己意識と損失回避志向が作り笑いに与える影響のみ検討した。作り笑いを従属変数とし、公的自己意識(低群/高群)×損失回避志向(低群/高群)の2要因分散分析を行った。公的自己意識尺度得点、損失回避志向尺度得点の中央値でそれぞれの尺度を高群と低群に分割した。なお、公的自己意識尺度得点の中央値3.88である13名のデータを除去し、3.88未満を低群、3.89以上を高群とした。損失回避志向尺度得点の中央値5.00である16名のデータを除去し、5.00未満を低群、5.01以上を高群とした。欠損値29名分のデータを除いて分析を行った。

分析の結果をTable3、Figure1に示した。損失回避志向の主効果が有意にみとめられた($F(1,72)=7.85, p<.05$)。公的自己意識の主効果はみとめられなかった($F(1,72)=1.63, ns$)。公的自己意識と損失回避志向の交互作用が有意であったため($F(1,72)=5.66, p<.05$)、単純主効果の検定を行った。その結果、損失回避志向が低い群において、公的自己意識の単純主効果が有意であった($F(1,72)=6.61, p<.05$)。損失回避志向が高い群

において、公的自己意識の単純主効果はみとめられなかった ($F(1,72)=0.62, ns$)。公的自己意識が低い群において、損失回避志向の単純主効果が有意であった ($F(1,72)=12.48, p<.001$)。公的自己意識が高い群において、損失回避志向の単純主効果はみとめられなかった ($F(1,72)=0.10, ns$)。

考 察

本研究の目的は、公的自己意識とネガティブな状況を回避しようとする損失回避志向が作り笑いに与える影響を調べることであった。尺度ごとの相関を比較したところ、「作り笑い」と「損失回避志向」に弱い正の相関がみられ、利得接近志向にはみられなかった。このことから仮説1は支持され、作り笑いと損失回避志向が関連することが示された。すなわち、損失回避志向が高いと作り笑いを表出するという傾向がみとめられた。作り笑いと損失回避志向の関連がみられたことから、

ネガティブな感情を制御する作り笑いにおいて、公的自己意識と損失回避志向の2要因分散分析を行った。その結果、損失回避志向の主効果が有意であり、損失回避志向の高い人は低い人よりネガティブ感情を制御する作り笑いを表出することが示された。このことから仮説2は支持された。そして公的自己意識と損失回避志向の交互作用がみられたため、単純主効果の検定を行った結果、損失回避志向と公的自己意識が低い人より、損失回避志向が低く公的自己意識が高い人の方がネガティブな感情を制御する作り笑いを表出していた。また、公的自己意識と損失回避志向が低い人より、公的自己意識が低く損失回避志向が高い人の方がネガティブな感情を制御する作り笑いを表出していた。公的自己意識と損失回避志向のどちらかが高ければ、ネガティブな感情を制御する作り笑いを表出することが示された。

作り笑いと損失回避志向に関連があり、作り笑いと利得接近志向に関連がないことから、対人関

Table3. 公的自己意識と損失回避志向の平均値とSD

	公的自己意識低群		公的自己意識高群	
	損失回避低群	損失回避高群	損失回避低群	損失回避高群
作り笑い <i>M</i>	3.31	3.80	3.66	3.70
<i>SD</i>	0.09	0.10	0.10	0.09

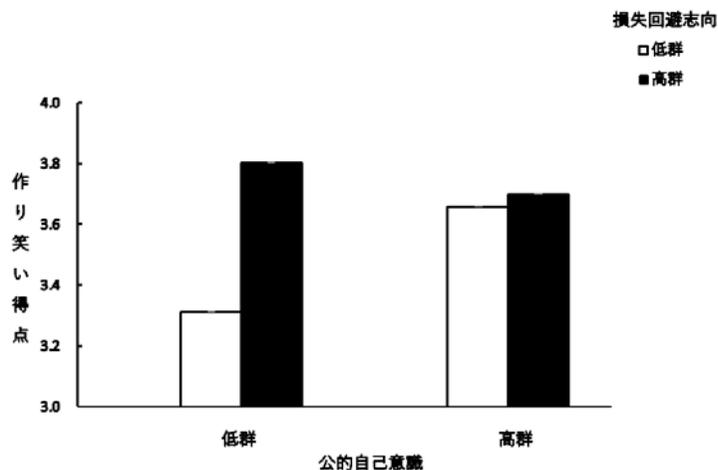


Figure1. 公的自己意識および損失回避志向が作り笑いに与える影響

係において作り笑いが目標を達成するために表出され（押見，1999）、目標を追求する志向性の違いによって、作り笑いを表出する可能性を示唆した。制御焦点理論において予防焦点時に示される志向性「損失回避志向」は、対人関係において他者に嫌われないことを求め、嫌われてしまうことを避けようとする（Higgins, 1997）と考えられている。損失回避志向が低い人より高い人の方がネガティブな感情を制御する作り笑いを表出することから、ネガティブな状況を回避し、対人関係において他者に嫌われないようにするために作り笑いを表出する可能性が考えられる。

他者から見られる公的な自己に注意や関心を向けやすい人は人にじっと観察されたり、無視されたりすることに敏感である（辻，1993）と考えられている。損失回避志向と公的自己意識が低い人より、損失回避志向が低く公的自己意識が高い人の方がネガティブな感情を制御する作り笑いを表出することから、公的自己意識が高い人は低い人より容姿やしぐさに注目しやすいため、他者にどのように見られているかを意識し、相手に良い印象を与えるためにネガティブな感情を制御する作り笑いを表出すると考えられる。

今回、仮説3「公的自己意識が高く損失回避志向が高い人は、それ以外の人よりネガティブな感情を制御する作り笑いを表出しやすいだろう」は支持されなかったが、公的自己意識と損失回避志向のどちらかが高ければネガティブな感情を制御する作り笑いを表出するという結果から、必ずしも公的自己意識と損失回避志向が高い人だけが作り笑いをするわけではないことが示唆された。

押見（1999）では、公的自己意識と作り笑いの関連を見出したが、本研究では公的自己意識と作り笑いの関連はみられなかった。押見（1999）は、公的自己意識の高い人の関心は他者そのものにあるのではなく、あくまでも自分の方にあり、自己評価にとって強い意味を持つ状況以外では公的自己意識の効果は弱まると述べており、このことが影響したのかもしれない。

対人関係において本当の感情を制御し、作り笑いを表出することはコミュニケーションを円滑に進める際に重要な役割を果たすであろう。本研究の課題として、ネガティブな感情を制御する作り

笑いが表出される状況の対人関係の親密さが考慮されていないことが挙げられる。個人的な事柄を親しく話せる友人と顔見知り程度の知人とでは、作り笑いを表出する頻度が異なるかもしれない。以上の点を改めて検討する必要があるだろう。

引用文献

- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. New Jersey: Prentice-Hall. (工藤力（訳）(1987)). 表情分析入門—表情に隠された意味をさぐる—誠信書房)
- Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 福島 明子(2008). 笑いに対する意識と対人コミュニケーション 人間文化創成科学論叢, 11, 399-411.
- Higgins, E.T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280-1300.
- 池田 善英 (2017). 作り笑いに及ぼすパラノイア効果 経営論集, 6, 79-90.
- 押見 輝男 (1999). 社会スキルとしての笑い 立教大学心理学研究, 42, 31-38.
- 尾崎 由佳・唐沢 かおり (2011). 自己に対する評価と接近回避志向の関係性—制御焦点理論に基づく検討—心理学研究, 82, 450-458.
- 李 珊・渋谷 昌三 (2014). 社会的笑いの表出に対する意識についての日中比較 目白大学心理学研究, 10, 25-38.
- 辻 平次郎 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房

謝 辞

本論文を作成するにあたり、質問紙の配布、助言や指導をして下さった神原歩先生に感謝いたします。そして、質問紙の配布に協力していただいた友人、質問紙調査に協力していただいたすべての方に心から感謝いたします。ありがとうございました。